

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

オセアニア民族資料収集調査記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石森, 秀三 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004653

オセアニア民族資料 収集調査記

石 森 秀 三*

まえがき

1975年10月中旬から12月下旬までの70日間、わたしは、国立民族学博物館の民族資料収集調査メンバーの一員として、オセアニア地域に派遣された。

今回の旅では、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、西サモア、トンガ、マーシャル諸島などで、民族資料収集調査の仕事に従事した。これらの各地で仕事をすすめる上で、多くのひとびとのご協力をえた。ニュージーランドでは、D. R. Simmons 博士 (Auckland Institute and Museum), L.H. Williams 氏 (Fisher and Peykel 社), Kuru Waaka 氏と J. Taiapa 氏 (ともに Maori Arts and Crafts Institute)。フィジーでは、鈴木猛博士 (国連世界保健機関)。サモアでは、大石敏雄氏 (トランス・パシフィック・ディベロップメント社), Saver Malietoa 氏, 吉川浩史氏 (青年海外協力隊 西サモア駐在調整員)。トンガでは、Sione Moniate 氏はじめハベルロト村の皆さん、川上晋氏 (国際協力

事業団 派遣専門家)。マーシャル諸島では、具志忠太郎氏, Shigeru Chutaro 氏はじめタカイワ島の皆さん, Tarawij Bohanny 氏, 平間宏治氏 (南洋貿易 k. k. マジュロ駐在員)。以上のかたがたにはたいへんお世話になった。とくに記して、感謝の意を表しておきたい。

1. 三つの辞令

出発に先だって、梅棹忠夫館長から、3つの辞令を手渡された。まずはじめに、資料収集臨時資金前渡官吏を命ずるという辞令、ついで分任契約担当官および分任物品管理官を命ずるという辞令である。一度に3つもの官職を与えられたが、そのどれもが生れてはじめて耳にするものばかりである。そこで、これらの辞令の意味するところを少し調べてみた。

その結果、つぎのことがわかった。まず、資料収集臨時資金前渡官吏という辞令は、外国で民族資料を購入するための資金の交付を受け、その資金をもって現地で現金支払することを、一定期間 (外国出張期間中) にかぎり臨時に委任されたことを意味している。そして、分任契約担当官という辞令は、今回の外国出張期間中にかぎり、現地における民族資料購入の契約に関する事務の管理を委任されたことを意味している。同様に、分任物品管理官という辞令は、今回の外国出張期間中に購入した民族資料などの物品の管理を委任されたことを意味している。

なぜこのような辞令が発令されたかということについては、もう少し説明を加える必要がある。今回、国立民族学博物

* 国立民族学博物館第4研究部

館の民族資料収集調査に派遣されることになったメンバーは、すべて研究部の教官たちである。ところが、教官は、もっぱら研究・教育に従事することを職務としており、現金の出納保管や契約事務の管理などを本務とはしていない。そのため、理想論からすれば、海外における民族資料収集の仕事は、外国の民族資料について豊富な知識をもつ教官と事務の管理について豊富な経験をもつ事務官がチームを組んで、業務を遂行できれば最善である。しかし、予算などの都合で、それはいまだ実現できない。そこで、次善の策として、外国の民族資料についてくわしい知識をもつ教官のみをまず派遣することになった。それにともない、派遣される教官たちは、外国出張期間中にかぎり、収集資金の出納・保管と資料購入契約に関する事務の管理と購入物品の管理を委任されたわけである。

上記の3つの辞令をうけた、資料収集メンバーの教官たちは、出発を前にして、収集業務に関するオリエンテーションを受けた。そこで、収集業務遂行上、不可欠であるとされる、多くのことを教えられた。まず、資料購入費および謝金の出納保管には細心の注意をはらうこと。ついで、現地通貨への換金に際しては、かならず交換計算書をもらうこと。現地政府から、民族資料の収集許可および輸出許可をとること。資料は適正価格で購入すること。現金出納簿は、毎日、記帳すること。資料を収集したら、すぐに収集カードに必要な事項を記載し、それに荷札をつけて、ポラロイド・カメラで写真をとること。物品管理補助簿および消耗品受払簿は、そのつど記帳すること。収集した資料の日本への輸送については、現

地で信用のある輸送業者を探して交渉すること。収集した資料はかならず、昭和50年度内に博物館に到着するように手配すること。博物館との連絡をおこたらないこと。以上のほかに、数えあげればきりのないほど多くの注意事項を教えこまれた。

そのうえで、出張期間は70日という短期間であり、その間に、オーストラリア、ニュージーランド、西サモア、トンガ、マーシャル諸島などで、民族資料の収集調査をしなければならない。相当なハード・スケジュールとなりそうだ。

これらのオリエンテーションを受けているうちに、わたしの頭のかたすみにあった、南太平洋のどこまでも清く澄みわたった青空が、だんだんと灰色に変色してゆくのであった。どうやら、わたしは、一筋縄ではいかない仕事をひきうけてしまったようだ。

2. ニュージーランドにて

1975年10月18日の夜、わたしは羽田空港より、最初の目的地であるオーストラリアにむけて飛び立った。機中泊で、翌朝、シドニー空港に到着。そこから、すぐに首都のキャンベラに飛ぶ。キャンベラには、2日間滞在して、オーストラリア国立大学 (Australian National University) の太平洋地域研究所 (Research School of Pacific Studies) を訪問するとともに、オセアニアの諸民族に関する文献資料を多数購入する。

ついで、キャンベラの仕事を終え、10月21日の夕方、ニュージーランドのオークランド空港に到着。5年ぶりのニュージーランドである。わたしにとって、ニュージーランドは思い出深い国である。

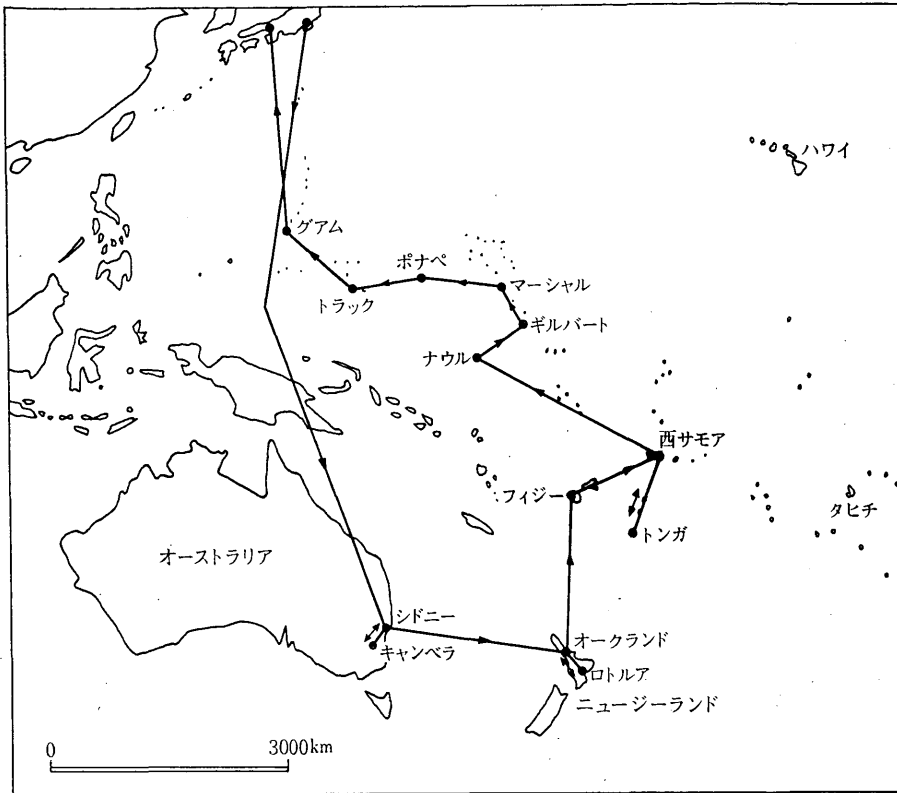


図1 オセアニア民族資料収集調査旅程図

大学卒業後、すぐにニュージーランドへの留学を決意し、1968年から1971年までの約2年間、オークランド大学大学院で社会人類学を学んだ。ニュージーランドで友人や知人に会って旧交を暖めたいのだが、今回の旅では、そのような時間的余裕がない。ニュージーランドでは、ロトルアのマオリ工芸研究所 (Maori Arts and Crafts Institute) を訪問し、先住民マオリ人の伝統的な木彫を施した集会場を製作してもらうための事前交渉をしなければならない。

現在のニュージーランドは高福祉国家として有名であり、またイギリスよりも

イギリスらしい国といわれる。しかし、ニュージーランドは白人だけの国ではない。ニュージーランドに白人が植民しはじめたのは、1769年にキャプテン・クックが北島を再発見してからのことである。クックがニュージーランドに上陸したときには、もうすでにポリネシアの民であるマオリ人がこの地に住みついていた。しかし、鉄器すらもっていなかったマオリ人は、後発の白人に銃器をもって力づくで抑え込まれた。その結果、マオリ人は社会的・経済的に抑圧された状況におかれることとなった。しかし、そうした状況のなかで、マオリ人は自分たちの伝

統のすべてを失なったのではなかった。社会的・経済的に抑圧されようとも、彼らは自らの文化的伝統を保持しようとしてとめた。なかでもとくに、マオリ人の木彫の技巧はたいへん優れており、先祖のあみだした緻密な木彫の技法を現在にまで、脈々と受け継いできている。

3. マオリの木彫文化

木彫文化はポリネシアのいたるところでみられる。しかし、マオリ人の木彫技巧は、そのもっとも完成した域に達しているといわれる。彼らは多くの事物に木彫を施したが、なかでもとくに、戦闘用カヌーの艫と舳や集会場などの住居に施された木彫が著名である。わが民族学博物館でも、マオリの完成された木彫文化を展示するために、木彫が施された集会場を購入する計画がたてられた。それに

ともなって、この計画を実現させるための事前交渉をニュージーランドでおこなうという仕事が、わたしに課せられたのである。

そこで、わたしはまず、オークランド博物館(Auckland Institute and Museum)を訪問し、マオリ文化の研究者であるD. R. Simmons 博士に会い、わが博物館のこのプロジェクトについて助言を求めた。わたしの話を聞いたのち、博士はつぎのような助言をしてくれた。まず、わたしたちの予算では集会場を新たに製作することは不可能であること。集会場よりも、むしろパタカとよばれる倉庫小屋の方が展示に適すること。パタカであれば、予算内で製作が可能であること。パタカに施された木彫は、集会場のものと類似しており、マオリの木彫文化の完成された技巧をよく示していること。以

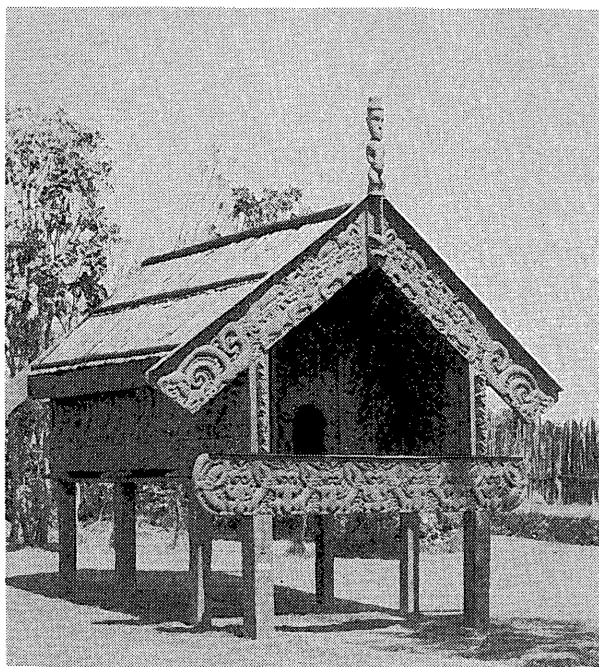


写真1 マオリのパタカ

上のような助言を、マオリ文化研究の専門家の立場からしてくれた。

このあとで、オークランドの Fisher and Peykel 会社を訪れ、その貿易部門の取締役の L. H. Williams 氏と面談する。もしパタカを購入することになった場合、それを日本に輸出してもらうための業務の代行を依頼するためである。幸いなことに話し合いはうまくゆき、パタカの輸出にともなう業務は、Williams 氏が担当してくれることになる。

オークランドで、マオリの木彫についての可能なかぎりの情報をえたのちに、ロトルアにある、マオリ工芸研究所を訪問した。この工芸研究所は、国立の機関であり、マオリ人のもつ工芸技術を保存・研究し、それを若い世代に伝えていくための教育機関であるとともに、各種の工芸品を製作している。そこではいま、約20人ほどの20歳代の若者が研修生として学んでおり、主として木彫の技術を伝授されている。研修生は3年間この研究所で学び、マオリの伝統的工芸技術を身につけ、その担い手となる。

日本出発前から手紙で事前交渉をはじめていたので、所長の Kuru Waaka 氏と主任彫刻師の J. Taiapa 氏がこころよく迎えてくれた。早速、彼らと交渉をおこなう。その結果、やはりオークランド博物館の Simmons 博士の助言通り、われわれの予算では、集会場を購入することは不可能であることがわかる。そして Waaka 氏もやはり集会場にかかわって、パタカを勧めてくれた。パタカであれば予算内で購入可能である。ただし、ここでむずかしい問題が生じた。それは製作完了の時期についてである。この工芸研究所では、いま大きなプロジェクト

を2つもかかえており、それらを完了してから、わが博物館のためのパタカの製作に着手することになる。そうすると製作完了するのは、1977年の春ごろになるということである。国立民族学博物館の開館予定は、1977年の秋ごろであるから、展示の準備の都合からすると、時期的に大変微妙である。なぜこのように製作に長期間を必要とするかについては、木彫そのものに時間がかかるということもさることながら、木彫以前にも問題のあることがわかった。つまり、木彫に適する木材であるカウリとよばれる木を手に入れるのに時間がかかるのである。というのは、ニュージーランドでも、森林資源保護政策がとられており、カウリの伐採が禁じられているからである。

しかし、いずれにしても、このパタカの件について、ここで、わたし一人で即決することはできない。博物館の収集委員会に指示を求めることにする。

4. オークランド大学

マオリ工芸研究所での事前交渉を終えて、ニュージーランドでの仕事は完了した。そこで、一日暇をみつけて、オークランド大学人類学科の研究室を訪問する。人類学科の建物は5年前とまったく変わっていないが、しかし教育・研究スタッフは大幅に入れ替っていた。まず、主任教授であった R. Piddington 教授は定年退官し、また当時助教授であった S. M. Mead 博士と I. H. Kawharu 博士は、ウェリントン大学マオリ学教授とマッセイ大学社会人類学教授となってそれぞれ栄転していた。また、同じく助教授であった F. W. Shawcross 氏と A. K. Pawley 氏は、オーストラリア国立大学

とハワイ大学にそれぞれ転出していた。しかしそれにもかかわらず、オークランド大学人類学科の教育・研究スタッフは以前よりも拡充されていた。まず、主任教授には、オセアニア言語学の権威である B. Biggs 教授が就任していた。そして、考古学教授には、オセアニア考古学の第一人者である R. Green 教授が就任し、同様に社会人類学教授には、ニューギニア高地民の研究で著名な R. Bulmer 教授と都市人類学者の T. Graves 教授が着任していた。これら四教授のうち、Biggs 教授をのぞく、ほかの三教授は、ここ2～3年のうちにあらたに着任したものである。そして、これらの四教授のほかにも、もちろん助教授・講師が10数人いる。このほかにもう一つ特記すべきことは、人類学科のなかに、Archives of Maori and Pacific Music が設置され、民族音楽学者の M. E. Mclean 博士が所長となっていた。教授陣が以前より拡充され、その上に若がえったことによって、オークランド大学人類学科は、以前にも増して、南太平洋地域研究の一つのセンターとなった感がする。

そういえば、オーストラリアのキャンベラで立ち寄ったオーストラリア国立大学太平洋地域研究所の人類学研究部門の研究スタッフも最近大幅に入れかわったようだ。まず、主任教授には、アメリカ人の R. Keesing 教授が就任していた。また、Professorial Fellow には、同じくアメリカ人の J. J. Fox 博士が着任していた。ほかにも、Research Fellow として、アメリカの若手の人類学者が数人オーストラリアに乗りこんできていた。その上に、以前は人類学研究部門のなかに含まれていた、考古学部門と言語学部門

がそれぞれ独立し、J. Golson 教授と S. A. Wurm 教授がそれぞれの研究部門の主任教授となっていた。このように、オーストラリア国立大学でも、研究スタッフの拡充と若がえりがおこなわれ（たとえば、Keesing 教授は40歳であり、Fox 教授は35歳である）、将来への飛躍が期待されている。

いままで、南太平洋地域研究のセンターとしては、いまあげた2つの大学のほかに、ハワイ大学、ビショップ博物館、シドニー大学、西オーストラリア大学などがあげられていたが、今回のわたしの旅からえた印象では、オークランド大学とオーストラリア国立大学が、研究スタッフや研究施設の点で一頭地を抜いたように感じた。創設間もないわが民族学博物館にあっては、これらの研究機関と交流をはかりながら、南太平洋研究を進めてゆく必要があることを痛感した。

5. 南太平洋のインド人

10月26日、ニュージーランドをあとにして、フィジー行きの飛行機に塔乗する。今日は一人旅ではない。吉川浩史氏（青年海外協力隊西サモア駐在調整員）といっしょである。吉川氏とは、マオリ工芸研究所のあるロトルアで偶然に出会い、西サモアまでの旅程がまったく同じであったので、その後西サモアまで旅をともにすることになった。

われわれの乗ったニュージーランド航空機は、フィジー国のナンディ空港に、夕方6時に到着。このあと、われわれは今夜7時30分発の西サモア行のポリネシア航空機に乗り継ぐ予定であった。そのため、ポリネシア航空のカウンターに急いだところ、おどろいたことに、もう満

席でチェック・インは終了したとのことであった。オークランドで予約の確認をしておいたのになんということであろう。よく事情を聞いてみると日本の団体客が今夜、急に割り込んできたために満席になったらしい。日本の団体さんは、いまや南太平洋の小さな島々をも闊歩しているのである。ポリネシア航空の係員と押し問答の末、結局うちがあかない。そこで、今夜の便はあきらめて、明晩の便にする。そして飛行場前のホテルに泊まることにする。ホテルに落ち着いてから、吉川氏と相談した結果、明日の待ち時間を有効に使うために明朝一番の飛行機でフィジーの首都スバに行き、そこでフィジーに永年駐在しておられる国連世界保健機関の鈴木猛博士に会い、そして午後の飛行機でナンディにもどることに決める。鈴木博士は吉川氏の知人で、昆虫学者であるが、フィラリアやデング熱の撲滅計画を担当しておられ、南太平洋の島々を広くまわっておられるので、各地の事情にとてもくわしい方である。

10月27日の早朝の一番機でフィジー国の首都スバに到着する。早速、バスに乗って、空港からスバ市街に入る。スバ市は大変活気のある都市であり、南太平洋のメトロポリスという感じがする。それにしても、なんとインド人の多いことだろう。まるでインドにきたような錯覚にとらわれる。現在のフィジーの総人口の過半数がインド人であり、彼らがフィジーの経済界を牛耳っていることは、以前から知っていた。しかし、やはり自分の目で確かめてみると、フィジーの将来について、とくに将来起りうるであろう異民族間の摩擦について、一抹の不安を禁じえない。事実、1970年のフィー

ジー国独立の際に、フィジー人とインド人のあいだで、各種の抗争事件が起きた。それらの一連の事件は、互いが新興国フィジーにおける主導権をわがものにしようとしたために起った。同じ国民同志でありながら、互いに異なる文化的・社会的・経済的背景をもっているが故に、各種の摩擦が生ずるのである。しかし、それは彼らのどちらの責任によるものでもない。むしろ、それは、みずからの利益のみを追求した白人たちの責任である。19世紀末にインド人をフィジーに連れてきたのは、白人たちであった。そしてインド人たちは肉体労働者として、白人のサトウキビや綿のプランテーションで働かされた。いまのフィジーのインド人たちは、その子孫である。ここでもまた、植民地主義の後遺症をみる思いがする。

6. 広くて狭い南太平洋

スバ市街を少し散策してから、鈴木博士のお宅を訪問する。そこで昼食をごちそうになりながら、南太平洋各地のことについて貴重なお話をうかがう。ここで一つおどろいたことは、鈴木博士のお宅は、南太平洋における日本人のいろいろな活動の情報センターのような役割を果しているということである。鈴木博士は、南太平洋における各種の日本人の行状をよくご存知であった。博士は、「南太平洋は広いようで狭いので、ここで仕事をする日本人のことについては、すぐに何らかの情報が伝わってきますよ」とおっしゃった。事実、考えてみれば、博士とはまったく一面識もなかったわたしが、いまここにこうして博士と対面していること自体、不思議といえば不思議である。

やはり、南太平洋は広いようで狭いのであろうか。

午後3時に、博士のお宅を辞して、飛行機でナンディにもどる。空港のロビーで、日本人らしい人を見かける。近づいてよく見ると、それはわが博物館の石毛直道助教授であった。石毛氏は、タイとインドネシアにおける民族資料収集の仕事を終え、ジャカルタからシドニー経由で今日フィジーに着いたところであった。石毛氏とは、これからあと、西サモアとトンガ王国で民族資料の収集の仕事をともしする予定であり、10月28日に西サモアで落ち会う手筈になっていた。そのため、ここでうまく会えようとは思ってもみなかった。そういえば、昨晚、吉川氏の知人である川上晋氏（国際協力事業団派遣専門家として、トンガに駐在され、漁業指導に従事しておられる）とそのご家族に偶然出会ったのも、この空港ロビーであった。川上氏ご一家は、日本での休暇を終えて、トンガにお帰りになるところであった。川上氏には、その後、トンガにおける民族資料の収集調査に関してなにかとお世話になった。このような偶然が重なると、やはり南太平洋は広いようで狭いと思わざるをえなくなる。これも結局は、南太平洋がジェット機時代に突入したということによるものであろうか。

7. 西サモアへ

10月27日の夕方、吉川氏と石毛氏とわたしの3人は、無事に西サモア行きのポリネシア航空機のチェック・インをすませた。そして待合室で、時を過す。しかし、定刻の午後9時30分を過ぎても、いっこうに塔乗案内のアナウンスがない。その

うちにやっとアナウンスがある。それによると、飛行機の後部ドアが破損しており、現在修理中とのことである。なんとも危なっかしい飛行機である。やがて10時が過ぎ、11時が過ぎても、まだ修理中とのことである。結局、12時近くになって、修理不能のため、明朝10時発に変更されてしまった。乗客はそのままホテルに直行せよとのこと。しかしだれも怒りだしたりする者はいない。われわれ3人も、「西サモアは遠いなあ」とただ苦笑し合うのみである。

明けて10月28日の午前10時に、ポリネシア航空機は、今度こそ定刻通りにナンディ空港を離陸する。快晴である。約3時間で、西サモアのファレオロ空港に無事着陸。日付変更線を越えたので、ここはまだ10月27日である。西サモアも快晴で、陽射しがきつい。

われわれは、西サモアには、2週間滞在する予定である。このような短期間のうちに資料収集をおこなうためには、現地でよほど信頼できる協力者が必要である。ここ西サモアでは、大石敏雄氏（トランス・パシフィック・ディベロップメント社社長）が協力してくれることになっている。大石氏は、1967年に、西サモアで現地と日本の合弁会社（製材会社）を設立するために派遣されて以来、この地に在住され、1970年にはみずから社長となって現在の会社を設立された方である。ところが幸いなことに、大石氏は大阪市立大学探検部員であったことから、もと大阪市立大学に勤務しておられた梅棹館長とは旧知の間柄であった。そのため、われわれは出発前から手紙で大石氏に協力を要請していた。

その大石氏に、われわれは西サモア到

着早々、空港で会うことができた。大石氏が、ニュージーランド人の友人を空港まで見送りに来ていたからである。ここでもまた、うまく偶然が重なったわけである。大石氏はわれわれを歓迎して下さり、車でホテルまで連れて行ってくだった。大石氏のご家族はいま一時、日本に帰っておられるため、大石氏は一人でホテル住いである。そこでわれわれもその同じホテルに泊ることにする。大石氏がホテルの支配人と交渉してくださった結果、彼のすぐとなりの部屋に陣どることになった。旅装をとく間もなく、早速、大石氏の部屋で、西サモアでの民族資料収集の仕事の進め方について打ち合わせをおこなう。

8. 資料収集のポイント

ここで、民族資料収集に関するいくつかの要点について、わたしの気のついたことを記しておこう。(1)わが民族学博物館の資料収集は、短期間で仕事をかたづけなければならないという制約があり、これが収集の基本前提となっている。そのため、短期間で学術的に意味のある資料を集めるための方策を事前に考えておく必要がある。(2)文献資料などを利用して、収集予定地の物質文化について、できるかぎりくわしい知識を得ておくこと。(3)現地で信用できる人に協力者となってもらい、資料収集に関して適切な助言を得ること。(4)民族資料の収集許可および輸出許可を得るために現地政府とできるだけ早く交渉を進めておくこと。(5)現地の有力者に、収集に関して事前に話を通しておくと仕事がしやすくなる。(6)資料を購入する場合、適正価格がどれぐらいかということについての的確な判断をくだ

す必要がある。多く払いすぎても、少なすぎても、あとでいろいろな問題をおこすことになりかねない。(7)収集した資料の輸送の便についてもよく調べておく必要がある。収集地国内における輸送と、収集地から日本への輸送の両方について、どういう方法が一番確実であるかを調べておく。そして現地で信用のある輸送業者を選ぶこと。(8)以前に何らかのかたちで、民族資料の収集を経験していることがのぞましい。以上、気のつくままに箇条書きにただけでも、これぐらいは最低限考慮しておく必要があるようにおもわれる。

このように、短期間で学術的に意味のある資料を確実に収集するということには、いろいろな困難がともなう。そのため、収集地の選定をする場合、結局、以前に自分が調査経験のあるところに落ち着くのである。たとえば、今回の南太平洋地域における収集地についてみれば、まずトンガ王国については石毛氏の15年前の調査地であったこと、またニュージーランドとマーシャル諸島についてはわたしの調査地であったことなどが、その収集地選定の理由である。しかし、ここ西サモアだけは二人ともまったく土地カンがない。そのため、西サモアについては、在西サモア9年目という大石氏の助言に頼るところ大であった。幸い、大石氏は学生時代に大阪市大東南アジア学術調査隊の一員として、東南アジア各地でフィールド経験をもっておられるし、また民族学についても造詣が深く、われわれの仕事に対して多大の援助を惜しまなかった。

もちろん、われわれも、日本で、Peter Buck の大著 *Samoan Material Culture* を

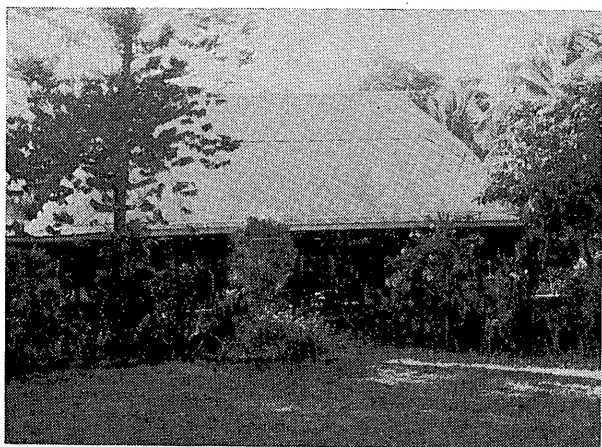


写真2 西サモアの伝統的民家ファレアホラウ

はじめとして、サモアの物質文化関係の文献について、目を通していただき、また西サモアで二度にわたって調査をおこなわれた、わが民族学博物館の杉本尚次教授から有益な助言をえていた。したがって、西サモアにおける収集の仕事は、大石氏のもつ生きたデーターとわれわれのもつ文献上のデーターをミックスして、はじめて可能となったわけである。

9. カヌーと民家模型

われわれが、西サモアでぜひとも収集しようと思っていたものは、カヌーと生活用具（漁具・農具・料理用具・楽器・敷物類・編カゴ類など）である。これらのものについては、ウポル島のいくつかの村を丹念に訪問して収集することに決める。ウポル島には、首都のアピアがあり、道路が比較的整備されているので、自動車を使えば、かなり能率があがりそうである。

つぎに、サモアの伝統的民家であるファレアホラウ (faleafoiau) の3分の1の縮尺模型を購入することに決める。サモアの伝統的民家ファレアホラウは、中心

柱6～8本で梁・桁を組み、それらが幅広い切妻の屋根を支える、という非常に珍しい構造をもった家屋である。そのため、この民家の実物をわが博物館で展示しようという計画があった。しかし、展示スペースの都合で、その計画は立ち消

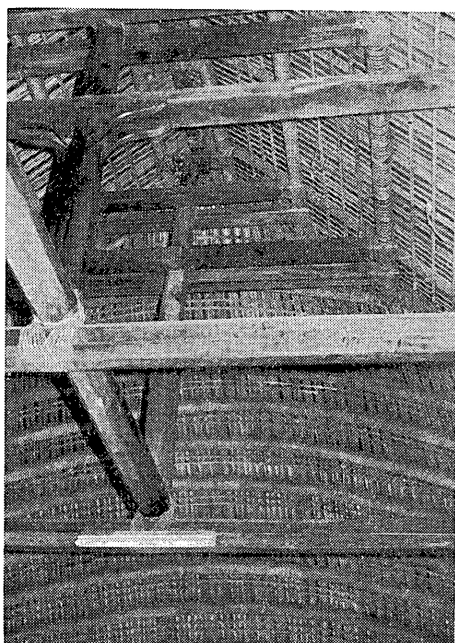


写真3 西サモアの伝統的民家ファレアホラウの内部

えとなった。この話を、大石氏にしたところ、それでは実物の代りに民家模型を作ってはどうかと提案してくれた。実物の民家の3分の1ぐらいの民家模型を、本物の大工に作らせようというのである。石毛氏と相談した結果、オセアニア地域でもっとも特徴ある、サモアの伝統的家屋を展示することは、たとえそれが模型であっても意味のあることと判断したので、民家模型を作ってもらうことに決める。早速、大石氏が有能な大工を探してくれることになる。これで、西サモアにおける収集計画の大筋が決まる。あとは、これを実行に移すだけである。

西サモア到着の翌日から行動を開始する。車を一台借り、そして英語のよくできる青年を一人雇った。彼には、ガイド兼通訳兼運転手になってもらう。まず、ウポル島の地図を手に入れ、早速、小手調べにアピア近郊の村を訪問する。結局、これから連日、朝10時から夕方6時ごろまで、ウポル島をかけめぐり、多くの村々を訪問する。その結果、各地で総計200点ほどの資料を収集できた。収集した資料は、大石氏のお力添で、前西サモア国国家元首の Saver Malietoa 氏の家に運び込み、そこに集積することになった。Saver 氏は、現在は公職から離れておられるが、西サモアの伝統文化について熟知しておられる方である。そのため収集した民族資料に対して、もっとも正確なコメントをつけてもらうには、Saver 氏をおいてほかにいない、という大石氏の判断によって、Saver 氏にご協力をお願いすることになったものである。幸い、Saver 氏は、われわれの意図をよくご理解くださり、収集した資料の不明な点について、懇切丁寧な説明を加えて下

さった。そればかりか、Saver 氏は機会あるごとに、われわれ二人に対して、西サモアの伝統文化について、いろいろな話をしてくださった。それはわれわれにとって大変貴重な話であった。

ところで、われわれが西サモアでぜひとも収集しようと思っていたものは、カヌーである。西サモアには、大きく分けて二種類のカヌーがある。一つはリーフ用カヌーで、もう一つは外リーフ用カヌーである。このうち、リーフ用カヌーについては、海外青年協力隊の吉川氏のお力添で、全長5メートルのものがすぐに手に入った。しかし、外リーフ用カヌーでいいものがなかなか見つからなかった。多くの村で、外リーフ用カヌーを見かけるのであるが、博物館での展示に耐えるほどのいいカヌーは見い出せなかった。

そこで、大石氏は西サモア・ラジオ放送局へ行き、外リーフ用カヌーのいいものを探している旨を、ラジオ放送してもらう手筈をととのえてくださった。西サモアでは、小額のお金で、プライベートなことでも、自由にラジオ放送してくれるらしい。ラジオが電報の役割を果しているのである。たとえば、「今日、子供が生れた」とか、「明日、どこそこの村に行くからよろしく頼む」などということが堂々と放送されている。案の定、ラジオ放送の威力は抜群で、早速、多数の問い合わせがあった。しかし、残念ながら、こちらの条件にぴたりするものはなかった。そこで、結局、新しい外リーフ用カヌーを作ってもらうのが一番確実と判断したので、大石氏に今度は船大工を探してもらうことにする。

一方、民家模型の方は、有能な大工の棟梁が見つかり、彼に製作を依頼する。

大石氏の会社の倉庫で組み立ててもらい、完成したら組み立てたまま、日本に輸送してもらうことにする。大石氏の会社には建築部門があり、その部門のマネージャーとして、日本の一級建築士の免許をもつ越智満雄氏がおられる。そこで、もっとも伝統的な民家とおもわれる、Saver 氏の家をモデルにしてその実寸をはかり、それをもとにして3分の1の縮尺の図面を越智氏に書いてもらった。その図面をもとにして、大工の棟梁が数人の助手を使って民家模型を製作することになる。製作には、約1カ月半を要する。大工たちは、山から木を切ってきて、それらをすべて実物の3分の1の太さになるまで山刀で削っていく。実物の家を作るよりも、手間がかかりそうだ。しかし、彼らは自分たちの作った家が、日本の大きな博物館で展示されると知って、大変はりきっている。おそらく、いいものができるであろう。この民家模型は、完成すれば、高さ約3.5メートル、長さ約5メートル、幅約3メートルとなる。模型といっても、結構大きなものである。

カヌーの方は、これもまた船大工が見つかり、すぐに製作に着手してもらう。全長約5メートルぐらいのものを作ってもらうことにする。船大工には、なるだけ伝統的な形態の外リーフ用カヌーを作ってくれるように頼んでおく。

この間に、つぎの目的地である、トンガ王国についての情報の収集をおこなう。その結果、トンガと日本を結ぶ船便は、3カ月に一度ぐらいの割で不定期便があるだけとわかる。そこで、当初の予定を変更して、トンガで収集する資料は、西サモアへ空輸し、西サモアでの収集資料とひとまとめにして、日本へ船便で送る

ことに決める。そうしないと、トンガでの収集資料が年度内に博物館に到着しない危険性がある。年度内に収集資料が到着しない場合には、事務上の受入れ手続がむずかしくなるからである。そのため、トンガには一週間だけ滞在し、そのあとでもう一度西サモアにもどることに決める。

10. トンガ王国へ

11月9日の朝、われわれは、西サモアでの2週間の資料収集の仕事を終え、つぎの目的地トンガ王国にむかう。ここで、ふたたびポリネシア航空機に塔乗する。今回はノー・トラブルで無事、トンガタプ島に到着。日付変更線を越えたので、トンガは今日は11月10日である。

石毛氏にとっては、15年ぶりのトンガである。1960年に、石毛氏は、京都大学トンガ王国学術調査隊の一員として、トンガ各地で調査に従事した。当時、石毛氏はまだ京大の学生であった。いままで、オセアニアやアフリカなどで数回にわたって、フィールド・ワークをこなしてきた石毛氏にとって、トンガはほかの調査地にはない思い出があるようだ。トンガは、彼にとって、最初の海外調査地なのである。どのフィールド・ワーカーにとっても、はじめての海外調査地というのは、いつまでも心にのこるものであるらしい。

飛行場で、タクシーをつかまえ、首都ヌクアロファへむかう。石毛氏は、食い入るように車外を見つめる。15年ぶりに目にするトンガはたいへん変ったと説明してくれる。しかし、運転手とあれこれ話をしている言葉のなかに、彼の15年前の記憶が確実によみがえりつつあること

がわかる。間もなく、ホテルに到着。遅い昼食をすませてから、今日一日は休養することに決める。西サモアで、2週間にわたって、一日も休まずに、資料収集の仕事をしたことによる疲れをとるためである。そこでまず、昼寝をする。しかし、根からのフィールド・ワーカーである石毛氏は常に行動的であった。2時間ほど昼寝をしたとおもったら、もうすぐにヌクアロファの中心街に出ていこうといいだす。王宮の近くを歩き回ったのちに、川上 晋氏（国際協力事業団派遣専門家として、トンガ王国で漁業指導をしておられる）のお宅を訪問し、トンガ到着のあいさつをする。川上氏から、トンガの近況について、多くの情報をえた。

トンガで収集する資料は、西サモアまで空輸しなければならないので、少数精鋭主義で資料収集をすることを決める。そこで、石毛氏と相談した結果、タパ（樹皮布のこと）とカバ・ドリンキングに関連する資料を重点的に集めることに決める。タパとは、樹皮布のことであり、イチジク属の木の内皮をむき、これをたたいて樹皮布をつくるのである。樹皮布づくりは、ポリネシアやメラネシアの諸

民族のあいだでみられるが、トンガのものがもっとも良質であり、また図案や染めつけもすぐれているといわれている。タパの製造用具としては、木槌、打ち台、染剤、染板などがある。つぎに、カバとは、胡椒科の灌木のことであり、その根の乾燥したものを石でたたいて、その粉末を水にとかして飲む。カバは一人で飲むことは決していない。数人で円座を組んで、共飲する。カバ・ドリンキングに用いられるものとしては、乾燥したカバ根、カバ・ボール、カバ・カップ、マットなどがある。トンガでは、これらのものを中心として、資料収集をする予定である。

11. ハベルロト村

トンガに着いた翌朝、石毛氏が15年前に調査をしたハベルロト村を訪問する。ハベルロト村は、首都ヌクアロファの近郊集落である。ホテルの近くから簡易タクシー（オートバイの前に四人掛の荷車をとりつけたもの）に乗って行く。約10分間ほど走って、ハベルロト村に着く。まず、村長の家をさがす。しかし、ハベルロト村のあまりの変わりように、石毛氏も土地カンがつかめない。ヌクアロフ



写真4 トンガにおけるタパの染付

ァ近郊の都市化がすすんだために、ハベルロト村は、ヌクアロファのベッド・タウンのようになっている。15年前とはくらべものにならないほど住居が増えているらしい。少し歩き回った末に、一軒の家に入って、道をたずねる。石毛氏が、トンガ語で道をたずねたら、対応にでてきた中年の女性は、おどろいたことに、石毛氏のことをおぼえていた。15年の歳月を経ても、ハベルロト村のひとびとは、石毛氏のことをちゃんと記憶にとどめていたのである。早速、村長の家を教えてもらう。村長に会ったところ、彼もまた石毛氏のことをおぼえていた。けれども、石毛氏に会った、すべての人が口をそろえて、「イシゲはもっとやせていたのに、とても太った」という。それに対して、石毛氏も負けずに「トンガ人みたいになったでしょう」とやりかえす。そういえば、たしかにトンガ人は太った人が多い。

石毛氏来訪のニュースはすぐに広まり、それから連日、あちこちらの家庭に食事に招待され、石むし料理をごちそうになった。そして、石毛氏と村のひとびとのあいだで、15年前の話に花がさいた。

ハベルロト村の人たちが、石毛氏を歓迎してくれたことによって、トンガにおける収集の仕事はもう九分通り成功したようなものであった。事実、彼らは、われわれの資料収集の仕事に全面的に協力してくれた。その結果、直径70センチメートルという大きなカバ・ボールをはじめとして、タパ関係の用具、タオバラという腰帯、蛸取り用擬餌、鼻笛、舞踊用具、敷物などを収集できた。しかし、クペシとよばれる、伝統的なタパ用染板がなかなか手に入らなかった。クペシとい

うのは、ココナツの葉柄を包む繊維を何枚か重ねて下敷とし、そのうえにココナツの葉の軸で図柄をえがいた染板である。クペシをつくるには、非常に高度の技巧を要するので、現在ではそれをつくれる人が少なくなり、各村に一人いるかいないかという状況である。そのため、クペシは大変貴重なものになりつつある。

われわれは、トンガタプ島のいくつかの村を訪問して、クペシをさがした。各村にクペシがあるにはあるが、だれも手ばなしたがらない。もうクペシの収集をあきらめかけたときに、やっとクペシをゆずってくれる人にめぐり会った。それはトンガを出国する前日であった。われわれは運がよかった。結局、伝統的な図柄のクペシを7点購入できた。これで、無事にトンガでの収集の仕事を完了することができた。

12. ふたたび西サモアへ

11月17日の朝、ハベルロト村のひとびとに別れを惜しまれながら、トンガを去る。収集した40数点の資料とともに、ふたたび西サモアにもどる。ここでまた日付変更線を越えたので、西サモアはまだ10月16日である。西サモアのファレオロ空港には、大石氏が迎えにきてくださる。そして前回と同じホテルに直行する。西サモアには、今回、石毛氏は3日間、わたしは6日間滞在する予定である。今回の西サモア滞在中の主な仕事は、西サモアとトンガで収集した資料の整理である。収集カードに必要な事項を記載し、資料の寸法をはかり、荷札をつけたあと、ポラロイド・カメラで写真をとる。この手順で、総計259点の資料を全部かたづける。

11月19日に、石毛氏と別れる。彼は、

このあと、ハワイに飛び、ホノルルのビショップ博物館で各種のレプリカの製作を依頼したあと、帰国する予定である。わたしは、11月22日まで、ここに滞在して、収集資料の日本への船積の交渉などをしなければならない。

新しく製作を依頼した民家模型と外リーフ用カヌーはまだ完成していない。これらのものについては、大石氏に仕事の監督を依頼する。そのほかの資料については、西サモアと日本を結ぶ大和海運の定期船にのせるため、代理店のバーンズ・フィリップ社西サモア支店と交渉をする。大石氏は、バーンズ・フィリップ社にも顔がきくので、彼に収集資料の船積の手配をお願いする。これで、西サモアでの仕事はすべて終了した。

西サモアでは、大石氏のご協力に全面的に頼る結果となった。やはり、短期間の収集の仕事では、現地で、大石氏のような信頼できる人を見い出せるかどうか、仕事の一つの大きな山のような気がした。

13. マーシャル諸島へ

11月22日の朝、西サモアでのすべての仕事を終え、ナウル共和国にむかう。ここでまた日付変更線を越える。考えてみれば、約1カ月間のうちに、4回も日付変更線を越えたことになる。なんとも落ち着きのない旅である。ナウルに3日間滞在したあと、11月26日に最後の目的地であるマーシャル諸島に入る。

マーシャル諸島は、29の環礁と5つのサンゴ島から成っている。日本統治時代には、そのうちのヤルート環礁が行政の中心地となっていたが、アメリカ信託統治領となった現在は、マジュロ環礁が中

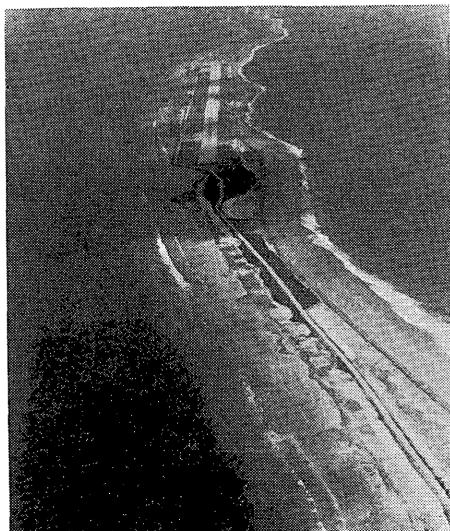


写真5 マジュロ環礁の飛行場

心地である。そのマジュロ環礁には、立派な滑走路をもつ飛行場があり、ハワイ、グアム、ナウルなどとジェット機で結ばれている。

ナウルからの飛行機は、ギルバート諸島のタラワで給油したのち、11月26日午前11時にマジュロ空港に到着。わたしにとっては、1年ぶりのマーシャル諸島である。こんなに早くもどって来れようとは思ってもみなかった。1974年8月から11月にかけて、わたしはマーシャル諸島のミリ環礁で、沖縄海洋博の海洋文化館に展示する民族資料の収集調査をおこなった。したがって、今度が二度目のマーシャルである。今回は、約1カ月間滞在于して民族資料の収集調査の仕事に従事する予定である。

ホテルに落ち着いてから、まず最初に具志忠太郎氏に会いに行く。具志氏は、沖縄出身の方で、19歳のときにマーシャルに来て以来、現在まで46年間のながきにわたって、ここに在住しておられる。い

ろいろな仕事を経験したのちに、現在はプロテスタント教会の牧師をしておられる。マーシャル人の女性と結婚し、現在では曾孫まで含めると、全部で50人以上という大ファミリーの家長となっている。そのため、マーシャルで骨をうずめる覚悟であるといわれる。前回は具志さんの紹介で、彼の長男のいるミリ環礁のタカイワ島に滞在して、民族資料の収集をおこなった。今回も、具志氏にご協力いただけるようお願いするつもりである。

ところが、お宅を訪問したところ、具志氏は病床に臥しておられた。体が痩せ衰え、点滴を受ける姿はなんともいたましい。日本にいたときに手紙を出しても返事がないのでおかしいと思っていたら、やはりご病氣であった。聞いてみると、どうやら肺癌らしい。本人もそのことを知っていて、もう悟り切ったという様子である。しかし、まだ肺癌と確定はしていないらしく、レントゲン写真などをハワイの病院に送って調べてもらっている最中であった。どうか肺癌でないことを祈らずにはおれない。体が相当に衰弱しておられるので、早々にひきあげる。

具志氏が、病の床に臥しておられ、協力をお願いできないということを知ったわたしは、少なからずショックを受けた。かくなるうへは、前回の滞在で、わたしが自分できずいた友人・知人関係を頼る以外に方法がない。

14. 伝統文化の喪失

マーシャル諸島は、1529年に探検家のAlvaro de Saavedraに発見されて以来、幾多の外国人と接触することとなった。とくに、1885年以後、現在にいたるまで、ドイツ、日本、アメリカなどによって統

治されてきた。異文化と接触したことによって、彼らの社会と文化に多くの変化がおこった。なかでもとくに、第二次大戦後の変化がもっとも激しいようである。またとくに、物質文化の面での変化が激しい。外国人によってもたらされた、新しい事物を、彼らがすぐに受け入れたためである。たとえば、食事にしても、いまのマーシャル人の主食はカリフォルニア産もしくはオーストラリア産の米であり、副食の筆頭はカンヅメ類であり、そして調味料の王様は日本製の醤油である。そのほか、トランジスター・ラジオ、テープ・レコーダー、携帯用無線機、モーターボートなどの最新の事物が、彼らの日常生活のなかで重要な役割を果している。マーシャル人たちは、コプラを売って得た現金収入でこれらの外国製品を購入するのである。

彼らの伝統的な物質文化のなかで、現在でも生きながらえているものはといえば、それはパンダナス文化とココナツ文化ぐらいである。まず、パンダナスについては、彼らは、その果実や葉を用いていろいろなものをつくる。パンダナスの葉を10数枚結び合わせてつくったアーチとよばれるもの（日本語の話せるマーシャル人は、これを“マーシャルのトタン”とよぶ）は、伝統的民家の屋根と側壁となる。また、その葉を編むことによって、各種のマット類、ウチワ、ホウキ、帽子、カゴ、袋などの生活必需品がつくられる。そして、パンダナスの果実は、生のままでも食べられるし、それを茹でて保存食にもなる。つぎに、ココナツもよく利用される。まず、ココナツの木の葉を用いて、各種のカゴ類とマット類がつくられる。ココナツの実の殻は容器となるし、

殻と外皮のあいだの繊維を編んでロープができる。外皮は天日干しにして、燃料として使う。もちろん、ココナツのジュースやコプラは食物としても重要であるし、また民間薬としても用いられる。このように、パンダナスとココナツから生み出される物質文化は、マーシャル人の日常生活でいまだに重要な役割を果たしている。

パンダナスとココナツのほかに、もう一つ忘れてならないものがある。それは、カヌーである。海の民族であるオセアニアの諸民族のなかでも、とくにマーシャル人は偉大なる航海者として有名であった。羅針盤こそ発明しなかったが、しかしそれに優るとも劣らない、彼ら独自の優れた航海術を身につけていた。スティック・チャートをあみだし、星座や波浪や渡り鳥など、天文・海洋の知識を巧みに応用して、あの広大なマーシャル諸島の島から島を航海した。けれども、現在のマーシャル人たちは、モーターボートや汽船の導入によって、カヌーによる長距離の航海をもう必要としなくなった。そのため、優れた航海術は忘れられてしまった。しかし、いまでも環礁内での重

要な交通機関として、カヌーが頻繁に使われている。そこで偉大なる航海者の名ごりをとどめるマーシャル諸島のカヌーをぜひとも収集しなければならない。

ところで、現在のマーシャルには、大きく分けて2種類のカヌーがある。帆走カヌーと手漕ぎカヌーである。できることなら、この2種類のカヌーとも収集する予定である。

15. 風の季節

前回、マーシャルに来たときには、ミリ環礁に約3カ月間滞在し、民族資料の収集をおこなった。そのときに、かなりの成果を収めることができたので、今回もできることなら、ミリ環礁に行きたい。しかし、ここで問題になるのは、ミリ環礁への船の便である。ミリ環礁に行くには、200トンぐらいのコプラ採集船に乗って行く以外に方法がない。そこで、船便について調べてみる。しかし、運の悪いことには、すでに11月に、ミリ環礁に船が行ったので、つぎはクリスマス前ごろでないと船便がないとのことである。したがって、残念ながら、ミリ環礁行きを断念しなければならない。



写真6 マーシャル諸島の
手漕ぎカヌー
ミリ環礁タカイワ島にて

そこで方針を変えて、マジュロ環礁のすぐとなりのアルノ環礁に行くことに決める。マジュロ環礁で資料の収集ができればよいのだが、ここはいまやマーシャル諸島の中心地であり、各環礁から人が集まって来て、過密化が進んでいる。そのうえに、外国から新しい物がつぎつぎに入ってきているので、伝統的な物質文化はほとんど姿を消している。だから、マジュロ環礁以外の環礁に行かなければ、いいものを集めることはできない。

ではなぜ、アルノ環礁に行くことに決めたかという、アルノ環礁であれば、マジュロ環礁から大型のモーターボートで約1時間半ぐらいで行けるからである。滞在日数が限られているので、確実にマジュロ環礁にもどれるところでないとだめである。もちろん、マジュロ環礁から、できるだけ遠くの環礁ほど、より伝統的な物質文化が残っている可能性がある。しかし、そのような離島であれば、一度行ったが最後、3カ月に一度ぐらいしか船便がない。出張期間の短いことを恨むばかりである。

アルノ環礁に行くことに決めたので、早速、大型のモーターボートをもつC氏と交渉する。その結果、わたしをアルノ環礁まで連れて行ってくれることになった。これでやっと行動開始である。しかし、ここでまた一つの問題が生じた。それは、ここ数日、風波が強いため、モーターボートを出せないことがわかった。風が強いときの太平洋の荒波をモーターボートでのり切ってゆくことは無理である。風がおさまるまで待たなくてはならない。

ところで、マーシャルには、2つの季節がある。añaneañ の季節と rak の季

節である。añaneañ の季節は“風の季節”であり、rak の季節は“雨の季節”である。“風の季節”は大体11月から4月にかけてである。だから、いまは“風の季節”のはじまりである。この季節は、雨が少なく、北東の強い風が吹く。そのため、この季節には、よほど風が弱いときでなければ、カヌーやモーターボートなどの小船で、外洋に出てゆくことは危険である。

アルノ環礁に行くことに決心したのに、風がなかなかおさまらず、まったく身動きがとれない。そこでこの間に、マジュロ環礁のなかで、もっとも伝統文化が残っているとされるローラ島に行き、目につくものを少し収集する。しかし、ここでも伝統的な物質文化は、ほとんど姿を消しつつある。ただし、ちょうど完成したばかりの手漕ぎカヌーのかなりいいものを見かけた。後日、もう一度きて、くわしく調べてみることにする。

16. ミリ環礁からきた小船

収集の仕事が思うようにはかどらないので、気はあせるのだが、なにしろ相手が自然のこと故、どうにもならない。相変らず、強い風が吹きまくっている。しかし、この風波の強い最中を一隻の小船（全長約8メートル）がマジュロ港に入ってきた。ミリ環礁からの船である。聞けば、昨年ミリ環礁でたいへんお世話になったシゲル氏（具志氏の長男）もその船に乗ってきたらしい。ミリ環礁で、主食の米がほとんどなくなったために、危険をおかして米を求めにきたのである。もちろん、コプラを満載してきていた。早速、シゲル氏に会いに行く。シゲル氏は、わたしを見て、とても喜んでくれ、

歓迎してくれた。そして彼は、ミリ環礁にある、彼の島(タカイウ島)に、もう一度ぜひ来るようにと誘ってくれた。彼は3日後に、小船でまたミリ環礁に帰る予定であった。わたしは、去年、その島に約3カ月滞在して、シゲル氏のご家族と寝食をともにした。だから、シゲル氏の誘いで、こころがうごいた。しかし、問題となるのは、帰りの船便のことである。クリスマス前に、ミリ環礁に行く船便のあることは知っていた。しかし、マーシャルでは、予定は常に未定であり、あてにならない。今回のような短期間の出張では、リスクのともなうことは避けておいた方が無難である。リスクといえは、あのような小船で、この強い風のときに、荒波にのりだせば、事故がおこらないともかぎらない。シゲル氏の話によれば、やはり無茶苦茶にゆれるようである。どちらにしても、危険なことは避けておいた方がよさそうだ。

12月5日になって、ようやく風がおさまってきた。待つこと、ちょうど一週間である。夕方、C氏がホテルにきて、明日はよい天気になるので、明朝、わたしをアルノ環礁に連れて行くと約束してくれる。そして、前金を要求される。前金を払って、契約が成立した。これで、やっと本格的に活動開始できる。そういえば、シゲル氏も明日の夕方、ミリ環礁にむけて出発するとのことであった。その夜、わたしはシゲル氏を訪問して、またの再会を約して別れた。

明けて、12月6日。予想どおり、今日は快晴である。風もなく、波もない。朝8時に、迎えの人がくることになっていた。準備をととのえ、ホテルで待つ。ところが定刻になっても誰もこない。9

時になっても、まだこない。どうもおかしいと思って調べてみたところ、C氏は、朝6時ごろにカツオ漁に出かけたことがわかった。昨日、ちゃんと前金まで渡して約束をしておいたのに、なんということであろう。すぐに、彼の奥さんに会い、前金をとりもどす。聞けば、今晚からまた天気が悪くなるらしい。そのため、今日のうちに、カツオ漁に出たのである。わたしをアルノ環礁に連れてゆくよりも、カツオをたくさん釣ってきて、マーケットで売った方が金になるらしい。

そこで、C氏のはかに大型のモーターボートをもっている人が3人いるので、すぐにそれらのひとびとのところに行き、今日中にアルノ環礁まで連れて行ってくれるように頼んでみる。しかし、そのうちの2人のモーターボートは、故障修理中でだめ。そして残りの1人のモーターボートは、今朝すでにアルノ環礁に人を運んで行ったそうで、これもだめ。そこで、明日連れて行ってくれと頼んだが、今夕から天気が悪くなるので、当分のあいだモーターボートは出せないとの返事をもらう。これで、ついに八方塞がりである。このままでは、満足のゆく収集の仕事はできない。どうやら、最後の決断をくだすときがきたようだ。あてにならない人を頼って、アルノ環礁に行くよりも、確実に信用のできるシゲル氏を頼ってミリ環礁に行くのが一番よさそうだ。荒海のなかを小船で航海することについては、一抹の不安を残すが、しかしもうこうなっては、ほかに方法がない。盲蛇に怖じず、という心境で、思い切ってミリ環礁に行くことに決心する。考えてみれば、どうやら、最初からミリ環礁に行く運命にあったのかもしれない。

しかし、クリスマス前に、ミリ環礁に行く船があるかどうかについては、もう一度確認しておく必要がある。帰りの船便がなければミリ環礁に行けないからである。そこで、District Office の船の運航を担当する係員に会ったところ、クリスマス用の物資をはこばないといけないので、クリスマス前には絶対にミリ環礁に船をまわすつもりだ、と彼は言う。その言葉を信じるほかない。

17. ミリ環礁へ

12月6日の午後5時に、小船はマジュロ港を出発した。船には、米、カンヅメ、ガソリン、トタン板をはじめとして、多くの生活必需品が積み込まれていた。それにしても、なんと小さな船であろうか。全長約8メートルで、幅約2.5メートルほどの小船である。そのうえに、船にはディーゼル・エンジンが一基あるだけで、それ以外に羅針盤もなければ、無電も装備されていない。ただ、70歳を越えた、白髪の老船長の永年培われたカンだけが頼りである。本当に、このような小船で、太平洋の荒波を無事に乗り切れるのだろうか。この船には、シゲル氏とわたしのほかに、ミリ環礁へ帰る人が13名も乗り込んでいる。

マジュロ環礁のラグーンのなかは、波もなく、快適である。わたしも甲板で皆と冗談を言い合うほどの余裕があった。しかし、1時間半ほどかかって、マジュロ環礁のなかを横断してチャンネルを通過し、外洋に出るととたんに波が荒くなる。そこで、わたしは急いで、船底にもぐり込む。そこにはもうすでに何人かの人たちが横になっていた。コプラのあの独特の臭いと人いきれでむっとする。しかし、

船の揺れがひどいので、わたしもすぐに横になる。

少しまどろんでから、目がさめる。揺れがひどい。そして気分がとても悪い。薄明りのなかで、時計を見ると、もう午後10時だ。それにしても、なんと激しい揺れ方だろう。波をかぶるたびに、船がきしむ音がする。いまにも波におしつぶされそうな音だ。気分が悪く、嘔吐しそうになるので、船底からはい出る。すると、荒れる波の間に間に、灯が近くに見えかくれする。「あれは何か」とたずねたら、「あれはマジュロの町の灯」との答がある。それを聞いて、わたしは愕然とする。マジュロ港を出発してから、もうすでに5時間も経つというのに、まだマジュロの近くを航行しているのである（あとで聞いた話によると、波が荒いので、遠回りにはなるが、横波を避けて、マジュロ環礁の裏海岸を通るルートをとったのだそうだ）。

依然として気分が悪いので、甲板のところへうずくまる。そこは、波もかぶるし、雨もかぶるので、シゲル氏は船底の方が安全だから、なかに入っているようにと注意してくれる。しかし、船底に入ったら、すぐにでも嘔吐しそうである。波をかぶっても、ここの方がいい。しかし、頭をあげていると、くらくらするので、甲板の柱にしがみついて、頭をかかえ込んで、うずくまるのみである。波と雨をまともにうけて、体がびしょぬれになる。とても寒い。しかし、ただひたすら、うずくまるのみである。わたしの横で、マーシャル人の若者が激しく嘔吐している。

午前2時ごろに、アルノ環礁の近くを通りすぎる。そこから、また一段と風雨

が強まり、横波をまともに受けるようになる。まさに、嵐のなかを航海しているようである。老船長とシゲル氏とほかに数人の男たちは、一睡もせずに、舵をしっかりととり、また荷くずれしていないかと点検している。彼らは、やはり偉大な航海者たちの末裔なのだ。しかし、途中で何度か、エンジンが止まる。そのたびに、このまま漂流してしまうのではないかとひやひやする。そうしているうちにも、大きな横波をまともに受け、波が甲板をかけ抜ける。そのたびに、わたしは必死で柱にしがみつく。船長やシゲル氏たちも必死である。彼らの必死の形相をみると、ますます不安な気持ちにおそわれる。どうやら、わたしは判断をあやまったようだ。やはり、数日待ってでも、アルノ環礁の方に行った方がよかった。だが、もう遅い。あとは、もう運を天にまかせるのみである。

やがて、夜が明ける。結局、わたしは一睡もせずに、雨と風と波をまともにうけながら甲板でうずくまって、夜を明かしたことになる。夜が明けて、あたりがはっきりしてくると、またしても絶望感に襲われる。船の何倍もの高さの大波がうねっているのである。大波が、わたしの上にのしかかってくるような幻覚にとられる。もう一刻も早く、この場をのがれたい。

そうしているうちに、朝の8時ごろになって、一人の男が突然、島が見えたと言った。それを聞いて、わたしも重い頭をあげて、前方を見る。しかし、何も見えない。見えるのは、ただ大波ばかりである。それからまた1時間ほど走ってから、ようやくわたしの目にも島影が見えた。それを見たとき、本当にうれしか

った。どうやら、わたしは助かったようだ。しかし、そう思うのは、まだ早かった。なかなか島に近づけないのだ。もうすぐそこに見えているのに、大波のなかで、島が見えかくれする。午前10時前になって、あと一步のところまでくる。しかし、チャネルを通るのが、また大変のようである。船が横波をまともにうけるからである。大揺れしながら、チャネルを無事に通過する。すぐそこにタカイワ島がある。わたしは、無事にミリ環礁に着いたのだ。

18. なつかしのタカイワ島

12月7日の午前10時過ぎ、無事にタカイワ島に到着する。実に17時間も一睡もせずに、船に揺られていたことになる。すぐに、シゲル氏の息子さんたちが、モーターボートで迎えにきてくれる。息子さんたちは、わたしの姿を見つけて、びっくりして、手をふっている。タカイワ島に上陸して、皆の歓迎を受ける。しかし、まだ頭がくらくらするし、気分も悪い。そのうえに、島全体が大きく揺れているようである。すぐに横になった方がよさそうだ。結局、このあとで、約4時間ほど、ぐっすりと眠った。

その夜、タカイワ島のひとびとが総出で、わたしを歓迎する儀式をおこなってくれた。島の女性と子供たちが、手に手にカゴをぶらさげている。そのなかには、パンの実、パンダナスの実、ココナツの実、パンモチ、大きな貝殻などが入っている。ニワトリを一羽もった男の子もいる。たくさんの花輪を首にかけてもらい、それらの贈りものを受ける。そのあとで、彼らは歓迎の歌をうたってくれる。最後に、シゲル氏の奥さんが、長々と歓迎の



写真7 マーシャル諸島の伝統的住居
ミリ環礁タカイワ島にて

辞をのべてくれる。このような歓迎の仕方は、むかし島に酋長が来たときにおこなっていた歓迎の儀式と同じものだろう。タカイワ島のひとびとの暖かい思いやりがひしひしと伝わってくる。やはり、苦勞をして、タカイワ島にもどって来たかいがあった。

タカイワ島の人口は、前回来たときよりも減っていた。この前は、7家族で65人いたが、そのうち3家族が別の島に移り、そのかわりに1家族がタカイワ島にやってきた。そのため、いまは5家族で40人になっていた。マーシャルでは、大きな集落が形成されることなく、ひとびとは島々に散らばって、小さな集落を形成して生活をしている。なにしろ、島が多いので、1カ所に集まる必要がない。たとえば、ミリ環礁は92の島々から成っている。

タカイワ島に到着した翌朝から、収集の仕事をはじめめる。これから、マジュロに帰るまでの日々を有効に使わねばならない。そこで、シゲル氏にたのんで、彼のモーターボートで、ミリ環礁の島々をできるだけ数多く訪問するつもりである。前回の滞在期間中に、ミリ環礁の多

くの島々で知人ができたので、彼らに再会して民族資料の収集の協力をしてもらうつもりである。結局、アニール島、ナンルー島、ミリ本島、エニチュット島、ルクノール島などの島々を再訪して多くの資料を集めることができた。

12月12日の夜のラジオ放送で、ミリ環礁に船が来ることが伝えられた。その船は、先にアルノ環礁に寄ってから、ミリ環礁に来るそうだ。この放送を聞いてほっとした。もしこの船が来なければ、いつマジュロ環礁にもどれるかわからないからである。

結局、12月16日に船がミリ環礁に入ったという知らせがくる。環礁の生活では、携帯用無線機が重要な役割を果している。マーシャルのほとんどの家庭では、日本製の携帯用無線機をもっており、毎晩、たがいに交信しながら、いろいろなニュースを伝え合う。船はミリ環礁の主な島々を回ってから、12月18日の夜にタカイワ島の沖合に着く。コプラを集めて、米などの生活必需品をおろす。そして、船はすぐに出発することになる。

いよいよ、タカイワ島の人々ともお別れである。別れは、いつの場合にも、つ

らしいものである。彼らといつまた会えるともわからないと思うと、なおのこと別れがつらくなる。タカイワ島の人々全員が、わたしを見送るために集まっている。わたしは、その一人一人と固く握手をする。最後にシゲル氏と握手をする。たがいに、無言である。言葉がでない。わたしは、ただ一言、マーシャル語で、「ありがとう」といった。シゲル氏の目に光るものがあつた。わたしは、急いで、モーターボートにかけ寄る。夜の別れは、よけいに人を物悲しくさせるようだ。モーターボートから船に移る。すると、船は静かに動きはじめる。次第に、タカイワ島のともし火が小さくなってゆく。いつの日にか、きっとまたタカイワ島にもどってくるつもりだ。

19. 収集おわる

12月19日の朝、ミリ環礁からマジュロ環礁にもどってくる。今度の航海は、船が大きいし、波もそれほど荒くなかったもので、たいへん楽であつた。

帰国するまでに、あと残された仕事は、カヌーの購入の件だけである。ミリ環礁でも、カヌーを探したが、なかなかいいカヌーが見つからなかつた。そこで、まず手漕ぎカヌーは、以前にマジュロ環礁のローラ島で見かけたものが、いままでのなかで、一番いいものであつたので、可能ならばそれを購入したく思う。マジュロ環礁にもどってすぐにローラ島に行き、その交渉をする。カヌーの所有者は、最初、法外な金を要求してきた。しかし、わたしはローラ島の有力者と知り合いであつたので、その人を通じて、話をうまくまとめてもらうことに成功した。これですぐ、手漕ぎカヌーを収集できた。

しかし、帆走カヌーはもっと遠くの環礁に行かないとだめようである。多くのひとびとの話を総合すると、エボン環礁の帆走カヌーが一番伝統的形態を残しているようである。同じ展示するのなら、一番いいものを展示したい。そこで、エボン環礁の出身の人で、カヌーのことについてくわしい人に、伝統的なカヌーを見つけてくれるように依頼する。しかし、今回のわたしの滞在中に購入することは無理である。できれば、次年度の予算で購入できればとおもう。

結局、マーシャルでは、総計 170 点の資料を収集できた。これらの資料のすべてについて、収集カードに必要事項を記載し、荷札をつけて、ポラロイド・カメラで写真をとった。あとは、これらの資料を、マジュロと日本を結ぶ、大和海運の定期船に積み込むだけである。大和海運の代理店である、KITCO (Kwajalein Import-Export Trading Company) に収集資料を託せばよい。しかし、その前にもう一つ、ぜひともしておかねばならないことがある。昨年、海洋博の海洋文化館に展示する資料を収集したときに、KITCO を通じて、日本に送った資料のうち、こわれていたものが多かったという。そこで、今回は、こわれやすいものについては、自分で梱包をする。スーパーマーケットで、紙箱と新聞紙とをもらって来て、ていねいに梱包をする。折角、苦労して集めた資料がこわれて日本に到着したのでは、泣くに泣けない。丸一日かかって、こわれやすいものの梱包を終える。

翌朝、すべての収集資料を、KITCO にもっていく。これで、マーシャル諸島における、わたしの仕事はすべておわ

た。あとは、収集した資料が無事に日本に到着することを祈るのみである。

マーシャルでの仕事が完了したので、12月25日に、マジュロ環礁を発つ、ミクロネシア航空機にのり、グァムに行くことに決める。当日の朝、無事に飛行機のチェック・インを完了する。いよいよ、マーシャル諸島に別れをつけるときがきた。紺碧の空、澄みきった海、涼しいヤシの木陰、こころあたたかい人々など、思い出多い環礁の生活とも当分おわかれである。いつの日にか、かならずもう一度もどってくるつもりである。見送りにきてくれた友人や知人に別れをつけ、ミクロネシア航空機の人となる。夕方、グァムに到着。グァムで一泊ののち、翌朝の飛行機にのり、無事に大阪空港に帰着した。70日ぶりの日本である。短いようで、長かった資料収集の旅のおわりである。

今回の旅では、総数 429 点の民族資料を収集し、そのほかに文献資料を 136 点

購入した。いまにして思えば、もっとやっておきたかったこともある。けれどもその反面、一応、所期の目的を達することができたという満足感もある。いずれにしても、いま一つの仕事がおわったのである。

しかし、収集の仕事がおわったからといって、それですべてがおわったわけではない。帰国したのちに、まずはじめに、資料収集臨時資金前渡官吏・分任契約担当官・分任物品管理官として、外国出張期間中に遂行した業務に関する必要な書類の整理をして、業務報告をしなければならない。そしてまた、わたしが収集した民族資料は、博物館に到着後、管理部や情報管理施設の多くのひとびとの手によって、整理・保管され、そののちに展示に用いられることとなる。収集のあとには、これらの一連の作業がひかえている。結局、一つの仕事のおわりは、同時にまた新しい仕事のはじまりを意味しているのである。